

令和4年度 第1回彦根城博物館協議会 会議録

日 時 令和4年8月12日（金） 14時～16時
場 所 彦根城博物館 講堂
出席者 井伊裕子委員、石丸正運委員、内田宏委員、田島達也委員、伏木利行委員、
宮崎隆旨委員、（50音順）
西嶋教育長、広瀬教育部長、井伊館長、渡辺副館長（学芸史料課課長）、
高木学芸史料課主幹、奥田学芸史料課係長、堀部管理課課長、野村管理課
課長補佐、荒田学芸史料課技師、中橋管理課主事

1. 議 事

（1）令和3年度彦根城博物館の事業報告について（年報）

（委員） 久しぶりに館で、会議ができたということもあるのだろうが、コロナで立ち直っていない部分もあるものの、色々立ち直ってきており、がんばって回復していることは良かったと思う。ホームページやTwitter、展示室の設備など、古臭い感じのものが、割と着実にちょっとずつ改善されてきたのが見え、また、これから受付回りも改装されていくということで、非常に良い方向に向かっている感じがした。Twitterを見たが、割と積極的に、今やっているものを写真付きで発信していることもあり、親しみやすさが増しているような気がした。

（博物館） Twitterについては、11月1日から運用を開始した。委員の言うとおおり、更新頻度は、職員みんなが頑張っていることもあり、即時性・即効性が求められるものやイベントの告知、展示品に関するちょっとしたつぶやき、四季の移ろいなどをつぶやいている。肩肘を張らずに、頻度を上げて発信していくことをコンセプトにしている。今年度、来年度と続けていきたいと考えている。

（委員） Twitter の話題が出て、思い出した。家族に「彦根城博物館が最近 Twitter を頑張っているから、見てみて。」と言うと、早速開き、一言「地味だな。」と。その後に、意見として「赤備えの甲冑が画面外向きになっており、これを画面内向きにすると話しているように見えて良いのでは。」と言われ「今度伝える。」と言ったことを思い出した。些細なことだが…。

（博物館） ご指摘いただいたところを早速変えられるよう努めていく。

（委員） 早く来たので、展示室を見せてもらった。フィルムを貼られたということだが、博物館の資料は非常に貴重なもので、元々光を嫌うこともあり、照度を落として展示している。そうすると、自分が見ている姿が映る。中の物も暗いため、それなりに時

間が経てばだんだん見えてくるという話もあるが、フィルム貼付によって非常に展示物がクリアに見え、姿が映らないだけでも素晴らしいなと思った。

(博物館) 展示室5と6に低反射フィルムを貼っている。見ている自分の姿が、白い服など着ているとよく映り込むのだが、背後にある展示ケースも映り込みが少なくなり、作品そのものに集中できるようになった。

また、ガラスが気にならなくなり、物が近くにあるように見え、なおかつ作品の細部までクリアで、より立体感を感じられるようになり、効果が高いと思っている。今年度、残りの展示室1~3の展示ケースにフィルムを貼る予定をしている。

(2) 令和4年度彦根城博物館の事業計画について

(委員) 私は美術史の担当なのだが、今年度の計画の中で、上田道三の企画展を楽しみにしている。この企画展のポスターやチラシを作成する予定はあるか。

(博物館) 企画展は、それぞれポスターやチラシを作成する。

(委員) なかなか彦根周辺だけでは、多分興味ある人は少ないかもしれないが、京都周辺だと興味のある人が多いと思うので、なるべく京都の美術館などでポスターを貼ってもらえると反応があるのではと思っている。ポスター・チラシ等々、是非掲示してもらえればと思った。

秋にある夜間の茶席はお茶だけなのか。その間に展示は見られないのか。

(博物館) 展示については、閉館時間後のイベントになるので、夜間観覧は難しく、展示室は入れない。動線は脇見所から正面見所を抜けて、木造棟へ行ってもらう形になる。能舞台はライトアップをし、能舞台を見ながら通ってもらう形にしている。

(委員) これは良い企画だと思うが、せっかく来てもらった人に「スペシャルな観覧もできる」みたいなものが組み合わさっていると、スペシャル感があって良いのでは。こういう機会に、時間は要らないと思うので、学芸員が案内しながら、「こういうものがあります。」と直接案内してもらえると良いのではと思った。「そこはいいから、お茶席だけ。」という人もいるかもしれないが、せっかくなので見てもらえればいいと思った。

(博物館) 展示室での「スペシャルな」という部分は、方法を内部で色々検討はしたが、そこまで手がかけられない。ただし、展示環境を守ったうえで、観覧してもらえる方法はないか、今後の研究とさせていただきたい。

(委員) 海外の博物館だと、いわゆる「友の会」にランクがあり、低いものは会報が

送付される程度だが、ランクが上に上がると、特別な案内をしているというものがある。彦根城博物館の「友の会」はどうなっているのか。こういった仕組みはあるのか。

(博物館) 「友の会」に入会された方の特典は、展示室の入場が無料になることと、展示解説のボランティアに登録をした場合、学芸員の説明を聞きながら自身が展示解説ボランティアとして活動するための勉強をしてもらうのだが、そこに企画展図録を無料で渡すなどといったメリットは用意している。

(委員) 彦根でうまくいくかどうかは分からないが、博物館では割と最近、お金を多く払った人がよりスペシャルな会員となって、より特典を増やすということをやっている館が増えているようなので、考えてもらえれば。お城という資源は大変魅力的であるため、お城ならではの、普通の人では体験できないようなものが体験できるとなれば、魅力があるかもしれないと思った。

(委員) 企画展の上田道三の展覧会だが、彦根市所有の物品の中に 200 枚程度の絵があったと思う。これらの現在の主管はどこになっているのか。また、保管はどのようにしているのか。

(博物館) 彦根市に寄贈いただいたものを仰っていると思うのだが、歴史まちづくり部の文化財課が主管をしている。開国記念館にて保管している状況である。

(委員) 上田道三の作品を 1 冊にまとめた図録を今までに作成しているか。

(博物館) 全て網羅的に載せている刊行物は出ていない。一部、モノクロ写真を入れるような形で、絵にまつわる彦根の歴史を語る単行本は出ているが、絵を全面に押し出して、きっちり見てもらえるような見易い本はまだない。

補足で少し申し上げておくと、上田道三は、京都で本格的に絵の勉強をずっとしていた方で、最近脚光を浴びている不染鉄^{ふせんてつ}という近代画家の弟子である。大変本格的な作品も残しており、今回の展覧会は、彦根の歴史・景観を描いた、皆さんが良く知っているような作品も展示するほか、道三が若い頃に描いた作品なども含めて、彼の全体像が分かるような形で初めて開催するものである。そこで作られる図録が、道三の画業をこれまでになく広く、なおかつ見易い図版で紹介できるものになる。

(3) 令和5年度彦根城博物館の事業取組について

(委員) 能舞台の活用において、指示で4年の能舞台での能や狂言の開催が見送られた理由は、コロナウイルスの感染症拡大防止の観点か、それとも能舞台の活用に向けた取り組みの考えにより、予算化が見送られたのか。

(博物館) 令和4年度の事業については、コロナウイルス感染症の感染状況が見通せない中、公演を開催することはリスクが高いという理由で予算化が見送られた。

(委員) 他の理由があるわけではないのか。

(博物館) 他に理由があるわけではない。

(委員) 日頃は、学校教育にご協力いただき感謝する。城西小学校では今年度1学期に6年生を連れて博物館で勉強をした。市内の小学校在どれくらい来ているかわからないが、小学生はだいたい6年生、中学生も来るかと思う。小学生・中学生では、大分程度に差があるが、小学生の中には色々な子どもたちがいる。彼らが来て、「よく分かったな。」「よく勉強できたな。」など、そうしたところを分かりやすく、勉強できるように色々改善してもらえればありがたいと思う。

教育普及活動に、総合的な学習の受け入れ等、学校教育との連携を進めていくということで1つあげてもらっている。具体的に、令和5年度はどういったことを考えているのか。

(委員) キッズサマースクールもあるが、子どもの時に博物館資料に出会っておくことは非常に大事なことだと思う。小学生に博物館を利用してもらうことは、深い意義があると思う。これからもお願いしたいと思っている。

(博物館) 城西小学校が一番彦根城博物館を利用している小学校なのは間違いないと思う。もう少し総合学習も含めて、他の小学校の利用が増えてほしいとは考えている。

子どもの頃に一度足を運んで見学することは、一生記憶に残るものだと思う。彦根の歴史に生涯親しんでもらったり、彦根に生まれたことを大切に思ってもらったりする機会になるため、我々もしっかり取り組んでいきたい。

学芸部門での小学生への企画として、キッズサマースクールをやっている。4年ほど前に募集をかけた際は、20名の定員にもかかわらず、数名という定員割れになっていた。昨年度から応募が大変増加し、その原因分析を厳密にはできていないが、100名を超す小学生から応募をいただいている。募集内容の企画の差なのか、去年は分析ができず分からなかったが、今年度も同様に、全部で40名枠のところ100名を超すような応募をいただいている。需要が増えてきたこともあるので、来年の方向としては、もう1日子どもを受け入れる日数を増やせるように対応を拡大したい。

連続で来る子どものことを考えると、1年生から6年生まで6回来てもらえる可能性がある。少なくとも6つのメニューがないといけないのだが、毎年新規のメニューを作るとはかなり労力がかかるため、従来からあるものも合わせて、6つのメニューをしっかりと固め、それをよりブラッシュアップするか、内容を濃くして学習効果の高いものに変えていくというような変更をしていきたい。

(委員) わくわく体験スクールやキッズサマースクールは、大変ありがたいと思う。ただ、そうしたことを学校教育と別枠で考えると、学校教育は学校単位で動く教育活動が主で、学校として例えば、色々な公共機関等から出前授業に来てもらうことが最近大変多くなってきた。学校としては団体で動く手間が省け、大変活用しやすくなってきており、相当数の出前授業を受け入れている現状がある。彦根城博物館では、そうしたことはまだかと思うのだが、そういったところも考えてもらえるとありがたい。例えば、100名という大変たくさんのお子もたちからの応募だが、ここに足を運んでとなると、色々な家庭、子どもがいるので、たくさんのお子もたちに教育を施すためにも学校という場が一番大切ではないかと思っている。学校教育の「総合的な学習の時間」の対応方法をぜひ考えていただきたい。

それと、11項目の展覧会があげられているが、城西小学校は、彦根城や井伊直弼のことを勉強する。興味を引くような茶の湯の話や企画展の講座の準備などされているのかと思う。小学生向けに、講座や展示などをかみ砕いて行ってもらえると大変勉強になるのではないかと。特に、城西小学校のお子もたちは飛びつくのではないかと思いを聞いていた。

それと関連なのだが、令和3年度の取り組みに多言語情報提供強化事業ということで、内容はわからないが、外国人向けに簡単に伝えるという取り組みが子どもにとっても良いのではないかと思った。令和5年度の総合学習受け入れ事業の中に入れてもらえると、お子もたちにとって勉強になるのではないかと思って聞いていた。

(博物館) 学校へのお出前授業は、彦根城博物館にリクエストをいただいて、例えば、城西小学校の場合、「井伊直弼のこういうことを学びたいので授業で話してください。」という依頼を受けて、実際に行って話をしたことはある。それは、その時の先生の考えを含めて、話が成立して行っているというのが実態。恒常的にこちらがメニューを用意して行くというようなシステムティックな対応はできていないというのが現状。ただ、しっかりと井伊直弼などの実績を分かりやすい形で伝えていくことは、大切なことだと思う。各学校にそれをやることは、全体の業務を考えると厳しい面があるが、例えば、小学校高学年向けの話す内容は、うちの方でしっかりと固めて、依頼があったときは、できる限り対応をしていく。

展覧会についても、すべての展覧会で子ども向けの講座を用意することは、実際のところ難しいと思うが、関心のあるところで、彦根城博物館にて総合学習等を行うなどの相談をいただければ、城西小学校に限らず、こちらでできる限りの工夫はしていきたい

と考えている。

多言語情報強化事業に関しては、あまり説明はしなかったが、博物館や作品についての日本語説明文をそのまま英語に訳すというのでは、なかなか良い英語ができないという多言語の課題が文化庁から言われている。日本語の内容を理解したネイティブの人が一から文章を作って、彦根城博物館の内容をまとめていくという形が必要だということで、外国人向け英訳ガイドラインに沿って、英語解説文を令和3年度に作成した。彦根城博物館に関しては英語だけだが、外国人が読んで理解できる英文を作り、この後、ホームページや外国人向けのガイドブックへ展開していこうと計画している。

こちらから質問して申し訳ないが、多言語を子ども向けの授業で生かすというのは、どういうイメージでおっしゃられたものなのか、教えてほしい。

(委員) 英語を使うというわけではなく、彦根城博物館の説明文は英語圏の方に彦根城博物館のことなどを理解してもらうための文章ということなのではないか。つまり、相当かみ砕いているのかなど。難しい日本語をわかりやすい言葉に変えて、伝えているのかと。そうすると、かみ砕かれた日本語がもとになっているのかと思ったので、それがあれば、子どもたちに相当分かりやすいと思った。

(博物館) 基本的にインバウンドの方へ、どうやって魅力を知ってもらうのかということから始まった事業。それは、かみ砕いてというよりも、日本文化を基本的に理解している人に向けて、その魅力をどうやって発信するかということである。外国から来て、本当に興味がある人が本を買うなどする。能やお茶のことなど、基本を理解した方々が、どうすればより深く理解してもらえるかというものであるため、残念ながらかみ砕いた日本語を目指したのではなく、ネイティブの方が日本文化の本質を理解するには、どういった言葉を使えば良いのかということ念頭に考えた。子どもが理解できるような文章にはなっていない。

(委員) そういった趣旨ならよく分かる。

(4) 彦根城博物館リニューアル計画について

(委員) 博物館で勤務していた時期に、改修にかかわったことはないため、リニューアルをどうすべきということは、よく考えてみないとわからない。専門的な業者の知恵も必要だと思う。そこは検討して、公募でもっていかれたら。私自身の能力では、改修のことは分らない。

(博物館) こちらのリニューアル計画に関して、彦根城博物館は公開承認施設であるため、改修について制約の多い施設である。公開承認施設のリニューアル計画や実施設計等の経験がある事業者を募っている。

特に、売店・受付廻りについては、職員の意見をしっかりと伝える中で、より良い形でホール廻りの環境整備をしていこうとしている。設計の専門事業者と館を運営する博物館職員が話し合いをして、こちらの要望を言う中で進めていく予定である。

(委員) きれいになって、洗練された売店廻りになることがすごく楽しみということが1つ。

あと、売っている物も随分増えたり、変わったりするということだったので…。彦根から他所へ、お土産を持っていかなければならない時に、「彦根の物」ということでよく博物館の売店に買いにくる。色々なものが増えると嬉しいと思った。

(博物館) なかなか厳しい予算のなかで、財政当局も予算を付けてくれているので、器にふさわしい中身をしっかりと整えたい。

予算の上限・限界があるが、アイデアでできる部分もあるかと思う。他の館の視察等もしつつ、リニューアルの際に「何も変わっていない。」ということが無いように、しっかりと考えていきたい。

(その他、全体を通しての質疑応答)

(委員) 能舞台の前のガラス戸が開くことは知っていたが、開いている時に来たことが無かった。これまでの稼働率というか、何回くらい開いて使われていたのか。

(博物館) 通常は、常時「閉」の状態。貸館での能舞台の利用や当館の自主事業である彦根城能・狂言の時だけ開けている。

(委員) その時は、展示室の方に空気が流入するのを我慢していた状態だったのか。

(博物館) 流入は極力避けなければならないため、開館時に設置されたスライディングウォールがある。脇見所を塞ぐ形で、壁に設置された引き戸から出入りをしてもらう。一応、区切りをしている形にはなるが、その区切りの性能が昔のものであるため、外気流入防止能力に乏しい。

(委員) これからは正面見所を開けても、展示室に影響があまり出なくなるということか。

(博物館) 今回の改修の趣旨は、委員のおっしゃるとおり、博物館主催のイベントだけでなく、貸館も含めて能舞台の活用ができるよう改修を行う。現在、貸館では、外気流入を防げないという部分の課題があるため、能舞台の利用がすべてウェルカムというわけにはいかない。しかし、改修によって外気流入が防止できるようになった暁には、利活用を図る。せっかくの能舞台であるので、演じていただける機会を増やせるようにすることが、今回の改修の趣旨である。

(委員) 大変素晴らしいと思う。何度も来ているが、あそこが開いているのを見たことがないので…。イベントの時に来られればいいのだが、そうした機会が少なかったため、これからそういった活用をされると良いなと思った。

それと、木造棟の方に行くところも、今までよく分からず通り過ぎる人が多かったが、改修の結果、行きやすくなるというのはとても良いと思う。しかし、それで行きやすくなった結果、木造棟のところはお庭も含めて現状大変良いのだが、ただ見て帰るだけという感じであるのが、ちょっともったいないと思う。お茶が飲めたり、何か買えたりという体験ができることにより、多くの人が木造棟へ行くのであれば、改修があってもいいのかなと思った。

(博物館) 現状は、扉の先に見るところがあるということに、なかなか気づいてもらえないという課題がある。今回はガラス戸への変更であり、それによって木造棟が透けて見える形になるため、木造棟の存在に気づかず、次の展示室へ行く観覧者が少なくなればという思いがある。

木造棟だが、御高廊下を超えたところで貸館利用をしている。お茶席等で利用が可能。昨年度はコロナの関係もあり、お茶席としての利用が1件だけであった。今年度はすでに1件予約が入っているのと、もう1件、お茶席をしたいと考えている方がいる。和の雰囲気、御殿の雰囲気を味わいながらのお茶席ができるような作り付けになっている。

(委員) 通常時に行ってお茶をいただけるという計画はないのか。

(博物館) お茶席については、給排水の設備が必要になるため、能舞台の横のお茶席を利用いただいている。現在のところ、そうした計画はない。

(委員) 現在の薄茶席は、博物館全体の中からすると若干ネックというか、しょぼいというか…。ここをもう少し強化すれば。

最近の博物館の体験は、美術品を見ることも大切だが、それと併せ、カフェ等を含めて、ゆったり時間を過ごすという体験も重視されている。今回の改修では入っていないが、薄茶席も今後の強化ポイントなのではないかと思う。

(委員) 全体の話であるが、最近の展示の解説、今回の企画展「彦根藩の足軽一歩兵たちの近世」もそうだが、資料のタイトルや解説があって、その中間に小見出しみたいなものがあるが、それがすごく良いと思った。興味のある人が読めば分かりやすい解説だが、「難しい。」「長い文章を読みたくないな。」というときに、あの小見出しがすごく良いなと思った。

(博物館) 特に古文書が多い展示などの解説の場合、古文書は題名も難しく、内容を書くだけでは、すぐに頭に入らないと思っている。まず、関心をもってもらうために、見出しのような感覚で付けるようにしている。さらに人の気を引くような見出しの付け方など、もう一工夫必要だと思っているが、良い方向に、さらに発展させていきたいと考えている。